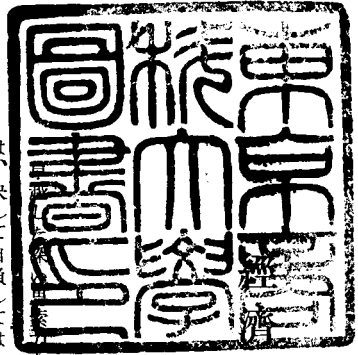




價值理論の一節

高垣寅次郎

は、決して自負してはゐない。たゞこの問題に就て私の考へてゐるところを、平明に、率直に述べて、私の守つてゐる心理主義の立場を明かにし、批判を仰ぐ機縁ともしたい存念から、茲にこの小篇を世に問ふことにした。諸學説の批判を第一義としないこの論文に於ては、文獻の涉獵によりて該博を期するよりは、私見の素描として、簡明に讀者に受容られんことを専念とした。論述を進める便宜のために、節を別ちて次の如くする。

- 一 經濟理論に於ける價值論と價格論との地位
- 二 經濟理論に於ける價值論の紛糾
- 三 經濟價值の心理的性質

一

現代の貨幣經濟は價格によりて流通の行はるゝ經濟であり、價格なければ貨幣の存在の意義はなく、貨幣は價格を

現はすためにその生成を促された。従つて價格は流通經濟の全現象に普遍的に纏はる屬性である。然れば流通經濟理論を考ふるに當りて、専ら之を價格を通じて見、之を價格の理論に統合せんとするものがある。斯くて價格論は今や經濟學の中心理論として重要な地位を與へられ、經濟學體系の中に最も主要なる部分を形成するものとして、深い研究を要求せらるゝ問題となつてゐる。然しながら、經濟學上價格論の占むる地位に就ては、從來必ずしも始めより今日の如き状態にありしものにあらず、幾多の消長變遷のありしことは、經濟學史家の示す多くの文獻に聽いて明かなところである。蓋し經濟學の科學としての性質自體に種々の異あり、その獨自の學的形式と固有の認識對象に就て論議の歸一する所を見ざる以上は、その一分科と考へらるゝ價格論が、各學派の岐るゝに従ひて著しく地位の高下を被るのは、免れざることゝ云はねばならぬ。

然し經濟學諸流派の歴史的進展の間から、價格論の占め來れる地位を概觀するならば、それは次第に全經濟理論中に重要性を加へ來れることを論定し得るのである。正統學派に於けるアダム・スミスよりマルサス、リカアドオへの展開は、實に經濟理論の主要課題として生産の問題を考へたものが、分配論の領域に進出したる學問體系の變遷である。更にゼイ・ビー・セイ、ゼイ・エス・ミルの出するに及んで完成せられた正統學派の學問體系は、謂ゆる生産、交換、分配、消費を以て成る區分法であつた。この經濟學の學問的進歩によつて、その觀點が生産過程より分配過程へ、更に交換過程へ、推移し發展し行ける事實に顧みるとき、その價格理論に與へられし地位に如何なる變遷を見たるかは、想像するに難くないことである。奧太利學派に至りては心理主義的に古典學派を深化し、價值論延いては價格論に新機軸を與へ、その科學的確立に努力したことは、一層價格論の地位を高めたものと理解すべきであらう。而して更に

その後新しく勃興し來れる社會學と關聯して、經濟學に一つの社會學的方法なるものが取入れられ、經濟現象をも亦社會現象として統一的に把握せんとするに及んで、價格はその最も顯著にして又把握に容易なる現象形態として、經濟學的認識の中心に立たしめられ、茲に價格の經濟學に占むる地位の上に著しい重要性を加ふるに至つた。(この點に就くは O. Spann, Fundament der Volkswirtschaftslehre. 3. A. S. 1—16. Stolzmann, Die Krisis in der heutigen Nationalökonomie, 1925, Vorwort. 等を参照せられたい。)即ち流通なる觀念に特別の意義が賦與せらるゝに至り、經濟學の體系構成に變革を來して、流通觀念による統一を得んとする立論の提唱せらるゝ所以のものは、蓋し斯かる社會的考察に基く結果であると思ふ。(例へば E. Lederer, Der Zirkulationsprozess als zentrales Problem der ökonomischen Theorie. 經濟學論集第三卷第三號所載論文參照)福田博士も正統學派以來の謂ゆる四分法に對して、新しき意味に於ける生産論に對應せしむるに、交換論、分配論を包含するところの流通論を以てし、生産及び流通の二分法を以て、最も現在の理論經濟學に妥當なる分類方法なりとせられた。この場合、この流通論の對象たるべき流通現象を最も簡潔的確に示す屬性としては、先づ以て價格を挙げねばならぬ。價格は常に流通現象に伴ひ、たとへ價格なき流通も之ありとするも、その現代經濟上の意義は乏しく、従つて價格は即ち流通論に課せられたる、最初にして而かも根本的な問題であるからである。斯くて新しく興起し來れる經濟學に於ては、價格理論はその中心的地位に引上げらるゝに至つた。上述するところによつて、經濟的發展に連れて進み來たれる經濟學自體の展開の裡に、價格理論の占むる意義は次第に重要性を加へ來り、以て今日に至れることを略ぼ理解し得ると思ふ。

然らば價格理論は何故に經濟學上斯く其の地位を高揚せらるゝに至れるか。その根基を想ふとき、茲に全く異れる

二つの動機より生ぜる二つの徑路を注目せねばならぬ。即ち一方に於ては經濟生活の實際的要求より必然的に價格論の高調に歸着せる學問的態度を挙げねばならぬ。近時動態經濟或は景氣變動等の問題は、殊に多く經濟學者の注目するところとなり、然かも斯かる經濟動態、景氣の變動は結局何等かの意味に於て價格形態を以て考へらるゝが故に、學者の研究焦點は自ら價格論の上に向けらるゝに至つた。(Vgl. K. Diehl, *Theoretische Nationalökonomie*, 3. Bd. *Lehre von Zirkulation*, 1927, S. 163—3.) 斯くて實際的要求に根ざす經濟研究の結果は、遂に價格理論の意義を加へ、その地位を上昇せしむるに至つたと云ふことを得る。然るに他方に於ては又、方法的省察に成立して價格に經濟的認識の契機を見出さんとし、經濟學を以て結局廣き意味に於ける價格理論に終始せしめんとする論者を見ることを得る。ディールは價值論排除論者の典型としてゴットル Gold-Ottlilienfeld リーフマン R. Liefmann ディーチェル H. Diezel 及びカッセル G. Cassel 等を擧げてゐる。(S. 110.) 固より其等の價值論を排する意味は一樣ではないが、カッセルの所論の如きは茲にその代表的なるものとして擧ぐべきであらう。例へばカッセルは云ふ「經濟學の對象は經濟生活にあり、その研究の方法に於て、吾人の努力を初めより直接にこの經濟生活の敘述に向けるならば、最もよき導手を得るであらう。従つて現實生活が示現するところの貨幣形態、即ち價格に於て交換經濟を研究することは正に當然なことであらう」と。(Cassel, *Fundamental Thoughts in Economics*, 1926, pp. 52—3.) 即ち彼は價值論を以て實益なき空虚の無用物として斥け、價值論なき經濟理論體系を價格構成の理論の上に築かんとするものである。その論據となるところを要約すれば略ぼ次のやうである。價值の評價は算術的に之を取扱ふことを得ないが、之を表現すべき共通の測度を用ふることなくしてその理論を組立つことは、大なる困難に遭遇せねばならぬ。然しかゝる共通の測度が取入

れらるゝや否や貨幣が問題となり、貨幣のない交換經濟を想定することは不可能である。その場合には最早や、價值は價格によつて代られ、價值理論に代へて價格理論をもつこととなる。この事實から結論して、謂ゆる價值の理論の全部は經濟學から排除さるべきであると云はねばならぬ。交換經濟の理論は始めより貨幣を取入れねばならぬのであつて、斯くて本質上價格の理論でなくてはならぬ。斯くすることは經濟理論の非常なる單純化であつて、無用の紛糾を伴ふた多數の問題を完全に避けることを得る。之によつて經濟學を最も性質の悪い煩瑣哲學に墮せしめてゐた論議から、解放し得るであらうと見るのである。(Cassel, Theoretische Sozialökonomie, 1932, S. 42 ff.) 價值の問題を斯く單に價格の問題と擇一的に考ふることは一面的であつて、兩者を因果的關係に於て *nacheinander* の關係に於て現はれるものと見るとき、自ら歸結するところは異つて來ねばならぬ。貨幣なき流通經濟は存在せざるか否か、又價值の測定は可能なるか否かと云ふが如きは、價值理論を拒否する上に本質的に根據となるべきことではない。然し茲には斯くの如き經濟學認識の方法が、果して妥當なりや否やの問題に深く立入ることを必要としない。とにかく上述するところにより、價格理論が實際的要求に發足せる論者によりて、又理論的改造を志す學者によりて、共にその重要性を加へられ來つた事實を見ることを得れば足りる。「總ての國民經濟理論はその途上に價格理論を發見する」と稱せられるのは無理のないことである。

斯くの如く價格理論の重要性をもち來ることは、決して價值の理論を無用とするものではなく、益、その意義を増して來る所以である。何となれば價格を客觀的な現象として顯現せしむる關係を考へるならば、我等は價值の現象にまで遡らざるを得ないからである。假に經濟社會に於ける流通現象を横に斷面をとつて、その面に現れたる價格の

問題を理解し、之によりて同一平面上の相互の關係が認識せられるとするならば、流通現象の縦なる斷面を考へ、一の段階に結果せられてゐる價格を、その前なる段階に遡らしむるとき、そこに價値の現象を見出さざるを得ない。問題を任意に限定して、その範圍内に於ける明確さと一貫性を求むることも、學問的態度として許さるべきことではあるが、それよりも能ふ限り忠實に現實の關係を究明し、事物の真相を把握すべき興味を捨てゝはならぬ。

或は經濟學に於ける近時の力強い一傾向に見ゆるが如く、價値の理論をその範圍外に放逐し、謂ゆる Wertlos の經濟理論を打立てるこそ、理論體系を確立するものだとする者がある。然しながら、經濟現象は人間社會の現象にして、外界客體の價値判斷的處置を内容とすると見ざるべからざるが故に、價値の理論は經濟理論の基礎に置かれねばならぬ。之を度外視しては、社會現象としての經濟現象も理解せられない。それは單に經濟前考的考量 *vorwirtschaftliche Erwägung* たるに止らずして、實に經濟の基礎的内容をなすものである。殊に主觀的立場をとりながらも、それが純粹に個人的にして、之を統一的に把握するに由なきの故を以て、經濟的問題となすまいとすること、例へばリーフマンの如きがある。然しながらその場合に於ても、價値なる語は避けられてゐるけれども、價値現象の正體は實質的には決して排除されてはゐない。經濟の本性は費用と效用との比較考量にあると稱する點に、既に價値現象の存在は意味されてゐる。それは唯だ他の用語、例へば *Schätzung* などの語によりて置き換へられてゐるに過ぎない。之は要するにこれまで價値理論の紛糾に禍されて、經濟理論の進展が阻害せられてゐると云ふ理由から、之をその範圍外に放逐せんとしたものであるが、結果に於ては用語の變更以上の効果を示してはゐない。即ち價値理論は價格理論の基礎として重要視せらるべきのみならず、有ゆる經濟理論の根底をなすものとして、追究されねばならぬ重要な問題である。

ディールも指摘せる如く、價格の形成は經濟生活に對し基本的に重要なことであつて、價值論の主要問題は、價格構成の究極の原因及び決定根據を茲に求むべきことの中に存する。一般價格の説明が問題となるのみではなく、價值論は又、分配論の理解のためにも根據を與へるものである。蓋し勞銀は勞働給付の價格であり、利子及び地代は資本及び土地の利用の價格であり、従つて價值論は殆ど總ての重要な經濟問題に對して意義を有するからである。（K. Diehl, Einführung in das Studium d. Nationalökonomie, 1933, S. 39. Grundbegriffe d. Volkswirtschaftslehre, 1934, S. 59.）又は財の價格を一般價格論とするに對して、勞銀、利子及び地代を所得理論として取扱ふも、一般價格論を補充すると云ふ意味に於て、各所得部門に於ける特殊價格論となす、ヴィーザアの主張とも相通するものである。（Wieser, Theorie d. gesellschaftlichen Wirtschaft, 924, S. 124.）即ち價值理論は有らゆる價格理論の根底に立つものとして、後者の地位の高揚せらるゝと共に益、その意義を加ふべく、理論經濟學の基礎問題として重要な地位を與へられねばならぬ。

二

「社會の經濟的興味に關する殆んど總ての思索は、或る價值の理論を含んでゐる。この問題に關する最小の誤謬も、之に照應する誤謬を他の總ての結論に傳へる。而してその概念に於ける如何なる曖昧も、その他の總てに互りて混亂と不明瞭とを造り出す。幸にして價值の法則には、現在若しくは將來の著者にとりて明確にせらるべき、何ものも残つてゐない。この問題の理論は完全である。」之はゼイ・エス・ミルがその著の完備を誇るかのやうに樂觀を示して

ゐる言葉であるが、不幸にして價值の理論は決して完成を見ざるのみならず、却つて上述する如き諸種の論難を受け、混沌として歸結するところを知らざるの實情にある。(J. S. Mill, Principles, Bk. III, Chap. I, Ashley's ed. p. 436.)

これまで經濟價值理論の上には、客觀價值説と主觀價值説との對立があるものとして一般に教へられてゐる。然しながらそれは一見豫想し得る如くに、同一の事實に對する異なる見解の對立であるか、先づその點を顧みなくてはならぬ。前者に云ふところの價值は主觀的意識の問題ではなく、客觀的に數量として表現されたものである。正統學派の所説にありては、價值と價格との間に何等の區別はなく、自然價值 Natural value は自然價格 Natural price に外ならず、市場價值 Market value は又市場價格 Market price と異なるところはない。主觀的意義の價值に至りては全く問題とされない。思ふに初期正統學派の興味の中心は、市場價格の動搖する中にありて何が中正の價格であるかを、自然的秩序の構想に従つて自然價值の名の下に見出さんとすると共に、現實に市場價格の變動を支配する原因を求めんとするにあつた。恰かも自然科学に於て、長さ、重さ等の客觀的眞實性を以て決定し得るものがあるが如くに、經濟學に於ても、價值なる基礎的事實に立脚せしめ得るところがなくてはならぬと考へた。即ち內在的價值 Intrinsic value の觀念が、實際の市場價格たる外在的價值 Extrinsic value と區別せられてゐたのであつて、今日云ふ如き意味に於ける主觀的價值は問題の中心に持たれてゐたのではない。殊にマルクシズムに於ける如く「商品は使用價值である」「勞働は價值の實體である」等と云ふときは、價值は一層の具體性を有つたものと見られてゐる。然るに主觀主義に云ふところの價值は、斯かる客觀的な存在ではなく、その前階段に立つ意識的狀態である。従つて等しく價值なる名稱によりて呼ばれるとは云へ、兩者は全くその内容を異にすべく、同一の事實に對する異なる二學説の對立の如く

考ふことは當を得ない。凡そ異なる學說の對立と云ふことは、同一の事實に對し異なる見解を生ずるとき始めて意義あることであつて、異なる事實に對し異なる見解を生ずるのは、寧ろ當然のことゝ云はねばならぬ。價值學說上に於ける異なる二主義の對立の如く考へられてゐるのは誠に意味のないことであつて、之を精密に云ふならば、價格の如き客觀的な現象の前に、溯りて心理的なものを考ふことの、經濟學上必要とせらるゝこととなるや否やの問題である。主觀主義か客觀主義かの對立にはあらずして、價格以前に抑も心理的な價值現象を觀念することの、經濟學上妥當且つ有意義なりや否やと云ふにある。

固より流通經濟組織の下にある經濟者の價值判斷にあたりては、既に成立せる經濟財の交換比率、即ち諸價格相互の關係を考慮の中に入れるべく、現實には價格を離れて價值判斷を行ふことはない。從て價值の問題は價格をその前提として豫想する、と見ることに一應の道理はある。然しながら理論上茲に問題とするのは、價格は價值判斷に基いて成立すると云ふことであつて、個々の價值判斷が既成の價格をその内容に於て考へると云ふ、事實上の連續關係を否定することではない。現在の價值判斷は價格を前提するとしても、その價格は價值判斷に基いて成立したことであり、斯くてその連鎖を手繰りて發端に溯れば、價值判斷は價格を離れて存在せねばならぬ。諸財の價值を比較し、その交換比率を定むることは、價格の存在と關係なく、凡そ交換の行はるゝにあたりて試みられねばならぬところであるが、その前にそれに先ちて、一定の比率によりて流通の行はるゝ事實が確立せられてゐなければならぬと云ふ事情は存しない。即ち之を理論の問題として見るとき、價值現象は總ての價格の成立にあたりて、前提せらるゝ要素であると云ふに不合理はない。

價值なる語の久しきに互る用法に囚はれた結果であらう、奧太利學派の理論の中にも、價值の本質に悖り、その所說の中に矛盾を生ぜしむる點がある。價值に種別を認め、主觀價值と客觀價值、私經濟的價值と國民經濟的價值と云ふが如く、本質上相異なるものを一概概念の下に統一せんとする如きは、價值の主觀的本質に混亂を生ぜしむるものである。

先づ使用價值と交換價值 Gebrauchswert u. Tauschwert との區別に就て見よう。この區別は凡そ價值を論ずる者の、一般に看過せざるところである。アダム・スミスも「價值なる語は二つの異なる意味を有つ。時としては或る特定の客體の效用を云ひ現はし、時としてはその客體の所有がもたらすところの他の財を購買する力を云ひ表はす」と云ふ。(Wealth of Nations, Cannan's ed. I. p. 30.) 然し之は、價值なる語に二つの用法のあることを認むるのみにして、兩者が一つの概念の下に於ける二つの種別なるや否や、兩者の關係に就ては別に説くところはない。奧太利學派にありては、正統學派に於けるが如くこの種別を認め、兩者の關係を次の如く説明する。經濟の發達尙ほ未だ低く、交換の行はれざる場合にありては、經濟者の需要を充すためには唯だ直接的に自らの努力によりて之を調達しなくてはならぬ。この場合には使用價值のみが問題となる。然るに發達せる經濟の下にありては、經濟者はこの方法以外に、その支配の下にある財を他人の財と交換することにより、謂ゆる間接的にその需要を充足するに至る。この場合始めて交換價值なるものが問題となつて来る。即ち一財が直接的に經濟者の欲望を充足することによりて得る意義を使用價值と云ひ、間接的に交換を通じて經濟者の欲望を充足することにより得る意義を、交換價值と見てゐるのである。

然らば使用價值と交換價值とは如何なる關係に立つか。メンガー C. Menger によれば、孤立經濟に於ては財は經

濟者にとり使用價值を有するか、或は一般に價值を有せざるかである。然るに發達せる文化狀態の下にありては、又活潑なる交易の行はるゝ場合にありては、財は使用價值を有するのみなる場合と、交換價值のみを有する場合とがあり得る。前者は例へば祖先の遺した文書の如く、特定の人には大なる使用價值を有するが、必ずしも交換の可能性を有つものではない。後者は例へば商品として存在する財の如く、賣手にとりては使用價值は認められぬが交換價值は大である。然し既に名づくるに足るほどの交換流通の發達せる場合に於ては、經濟者はその支配の下にある財を、その欲望充足のために直接的方法に於て用ふるか、或は間接的方法に於て用ふるかを選択することが出来る。従つて經濟財は彼等にとりては原則として、使用價值と同時に交換價值を有する。(Grundsätze der Volkswirtschaftslehre, 1923, S. 113) 即ち兩者は理論上互に排除せざるのみならず、原則として同時に經濟財に現はるゝに至るものである。從て兩者の差異は、單に之を以て欲望を充足する方法の上に存するのみとなる。原則としてと云ふは通常の場合と云ふほどの意味にして、固より例外なきことを考ふるものではない。

この區別は經濟價值以外の價值現象に見られざることであるが、その性質上自ら一方を客觀的なものに、他方を主觀的なものに結付けしむる萌芽を含んでゐる。即ち一は交換に用ふる場合なるがために、それが獲得する力と思はしめ、従つて又其れに換へらるゝ財の量を考へしむるに反して、他は直接的に之を使用する場合なるがために、其れによりて受くるところの效果を思はしむるがためである。正統學派の學者も多く擧ぐるところの例證たる、鐵と金剛石との比較、即ち前者は交換價值小なれども使用價值は大きく、後者は交換價值多けれども使用價值は少しとするが如きことも、兩者の價值の内容として考ふところ、必ずしも本質的に等しき一つのものに統合せらるべきもので

はない。價格と同視せらるゝ意味に於て使用價值を考ふること既に自然ではなく、客觀的意義に於て之を考へるならば、財の客觀的能力を問題とするの外はない。奧太利學派の所説に於ても、使用價值に就ては之を效用性に結びつけてその主觀的な側を強く浮上らせながら、交換價值に就ては動もすれば之を他の財を獲得すべき可能性即ち購買力として考へ、客觀的意味に之を轉化するの傾きを示した。即ち主觀主義自らの中にさへ、斯かる紛糾を喚び起すべき機縁を含んでゐる。主觀主義價值理論の下にありては、兩種の價值ともに主觀的のものたるべく、何れも評價主體によりて判斷せらるゝ重要性の認識でなくてはならぬ、即ち一は直接の使用によりて、他は他財を得るために用ふることによりて。若し交換に用ふることも使用の一方法に外ならずと見るときは、この區別を立てゝ使用價值と交換價值となすことは意味をなさぬ。之を直接價值と間接價值と見るは、或はよくその意味を傳ふることゝなるであらう。

次に經濟價值の區別として一般に認められてゐるものは、主觀的價值 subjektiver Wert と客觀的價值 objektiver Wert との別であり、奧太利學派の理論の上にも一般に見らるゝことである。然し之を混亂のまゝに放任することは、主觀的立場を取るものにありては撞着を免れないことである。ポエーム・バヴェルクの如きも、この點には大に考慮を廻らしてゐるのが見受けられる。即ち二つの價值概念を認め、主觀的意義に於ける價值 Wert im subjektiven Sinn とは、或る主體の福祉の目的に對して或る財若しくは財の量が有する重要性であるとし、客觀的意義に於ける價值 Wert im objektiven Sinn とは、一定の外的、客觀的效果をもたらすべく、吾人の判斷に於て認められた財の適性 Tüchtigkeit であるとしてゐる。従つて後者に就ては、財と我等が達成せんと欲する客觀的目的若しくは效果との關係に應じて、この意味に於ける價值が問題となるべく、例へば燃料の熱價值、食物の營養價值、艦船の戦闘價值等と云ふが如きこ

とが之に屬するであらう。然し此等の事實はたとへ價值の名によりて呼ばれようと、純技術的關係に屬することであつて、經濟學の問題としては何等の關係をも有たない。客觀的意義に於て問題となることは財の客觀的交換價值であつて、交換に於ける財の客觀的な *Geltung* であり、換言すれば與へられたる事實的關係の下に、交換流通に於て他の財の一定量を獲得し得べき可能性である。之が經濟學上極めて重要な問題をなすべきことは云ふまでもない。理論上、客觀的價值が殊に説明の目標となるものと云ひ得るならば、主觀的價值は説明の手段とも解せられると云ふ。(Böhm-Bawerk, *Positive Theorie des Kapitals*, I. Bd. 1921, S. 158—164.) 斯く一方に於ては人類の福祉に對する重要性と、他方に於ては他の財と交換せらるべき客觀的能力と、共通の特質を含まざるものを包容して、統一的概念を導き出すことの無意味なるは、ボエム自らもよく認めてゐるところである。或る語の内容、或はその用法等が、時代の推移と共に動いて行くのは避け難いことであつて、その變遷の道行を跡付けることは言語學者の仕事に委ねばならぬ。價值の語に含まるゝ内容を變へ、從つてその語の轉用乃至は分裂を來してゐる以上は、價值の理論自らもそれに應じて調整して行かねばならぬ。全く異なるべき對象をば、同一の名辭にて呼ばねばならぬことは、固より不合理極まることである。價值の理論に於ける混亂と曖昧とは、過去より傳はつた惰性に慣らされて、言葉を濫用したことに由來するところが大である。既にその不合理を認めるならばその區別を正し、經濟學に於ても、一方には主觀的價值と、他方には交換可能性たる購買力と、二つの方向にその理論を展開せしめ、それを規定する根本原理を尋ねて行かねばならぬ。

價值を主觀的なものと解する以上は、ディールの云ふ如き意味に於て、有らゆる時代有らゆる民族に共通なる價

値理論は存しないと云ふことも認めねばならぬ。價值理論の課題は經濟生活の歴史的形態に従つて著しく異なり、例へば家族經濟の時代と流通經濟の時代とに於て、甚だ異なる價值現象を生じ、經濟組織の相違すると共に價值問題も自ら異なるであらう。流通經濟に先だつ經濟時代即ち家族經濟の下にありては、家族自らの欲望に従つてのみ價值判斷は行はるべく、そこに問題となることは謂ゆる使用價值であつて、純粹に主觀的個人的ものである。之と異なり流通經濟の下にありては、價值は終極に於て個人的評價に歸着することは勿論であるが、それ等の評價は自ら或る平均的な大さに一致する傾向あり、主觀的な個々の評價、即ち各個人の欲求の窮迫性、所有及び所得の狀態等より離れて成立ち得ることである。價值に客觀性ある如く聯想せしむるはこの故であり、ディールはこの點に顧みて普遍價值と愛着價值 *Gemeiner Wert u. Affektionswert* との區別を立てた。前者は或る事物に對し個人的評價に基いて賦與せらるゝ價值であり、後者は市場價格の中に現はるゝ價值であり、一般的平均的評價に従つて賣買價格の中に具體化せらるゝ貨物の價值である。通例經濟生活に於て、或る價格の支拂にあたり現はれて來るのは普遍價值であり、特に欲求せらるゝ貨物と云ふが如く稀な場合にのみ、愛着價值が現象の上に現れると見るのである。(K. Diehl, *Theoret. Nationalökonom.* 3. Bd. 1927, S. 6. *Grundbegriffe d. Volkswirtschaftslehre*, 1934, S. 59, 62.) 主觀的個人的なる價值に一般性を帶びしめる所以に就ては、次節に於て私見を述べて見たい。上述の如き説明のみを以てしては、未だ謂ゆる普遍値なるものゝ成立する根據は明かにせられず、價值現象の普遍的性質は說かれない。價值に客觀的な或るものを豫想することは、價值の性質自體の許さざるところである。

三

價値の理論はひとり經濟學の占有し得べきものではない。殊に社會生活の發展と共に生活内容の複雑化を來たし、それに連れて諸種の價値現象を生じ價値の内容を複雑ならしめた。社會には諸種の行動の部面あり、制度がある。その各分野に於て其れに特有なる價値現象を生ずべく、學問的、道德的、藝術的價値等は經濟價値と相並んで、一般價値現象の一部分を構成する。然れば各個の價値現象の領域に於て、殊に主として學問、道德、藝術等の方面に於て眞善美の問題として、或は經濟生活に於ては效用性若しくは交換性の問題として各別に論究せられしに對し、此等を貫通する一つの統一原理の上に、有ゆる價値現象を取扱はんとする一般價値理論の研究は、最近數十年學問上の要求として現はれて來た。而して總ての價値は客觀的實在それ自體ではなく、或る標準に關らしめての被判斷對象と意識的主體との關係の中に成立するものであり、主體によりて意識せられ判斷せらるべきものなるを以て、主觀的、心理的性質を有するものである。

如何なる生活の領域に於ても價値ありとせられることは、その分野の生活目的に對し或る事物が有意義であり、役立つこととなくてはならぬ。政治生活の目的を達するために有意義なりと解せられるとき、そこに政治價値の現象を生ずべく、經濟生活の目的に役立つとせらるゝとき、經濟價値を生ずるものである。從つて價値は目的を豫想することであり、之を標準として或る事物の有する重要性を判斷したものである。價値は在るところの事物又はその性質に

あらずして、或る關係に就て斯くありと判斷せらるゝことなるべきを以て、主體の判斷を俟たなくてはならぬ。價值を心理的現象と見なくてはならぬ所以は之れである。斯く價值は或る生活上の目的を前提するものであるが、その關係を意識するに就ては、判斷者の自由なる意思、欲求のみによらず、之を規制するところの社會的なる、從つて個人の判斷を支配する力がある。評價する主體はこの力の影響の下に立ち、又斯く判斷すべき生得的傾向をもつてゐる。茲に個人的主觀的なる價值現象にも、社會的一様性と連續性とを具ふることゝなる。

價值の心理主義は價值現象を純粹個人的のものと限定するのではない。之は社會生活によりて發達し、又逆に個人並に社會に影響を與ふるものなることを認める。蓋し、各個人は異なりて反動作し、種々なる可變性を現すべき素地を有すれども、個人は社會からの影響を免るゝを得ず、社會全體に働きつゝある作用に支配せらるゝものにして、此等は個人の價值判斷の上に現はるゝが故である。個人的經驗たる價值が社會的なる作用に依存し、又逆に社會的作用ともなる所以は、少くとも次の如く之を説明することを得るであらう。即ち個人は價值を判斷し識別する生得的能力に於て、その血族的及び社會的祖先に負ふこと、個人は社會生活上同様の條件に作用せられ、その後天的影響を共にすること、個人の價值判斷は直接又は間接に、他の個人によりて著しく影響せらるゝこと、等之である。即ち社會を形成する個人は自ら意識する主體なると共に、その意識並に意識の顯現は他の個人の意識からの影響を受け、又逆にそれに影響する條件となる。斯かる理由によりて、本來個人的なる價值現象にも社會的なる性質を生じ、個人の價值判斷を導くべき社會的影響を生じて來る。然れば次の問題は、個人の心理に影響する社會的なる力は、如何なる方法に於てするかと云ふことである。

社會を一つの意識する主體と見、その心の存在を認むることは、思ふに十九世紀中葉の生物學發達の影響を受けて生れたる社會有機體説の反映と見らるべきものである。之に立脚して米國に於てはクラアク J. B. Clark セリグマン E. R. A. Seligman 等は、社會價值若しくは社會的限界效用などの理論を立てた。即ち社會の意識する限界效用があり、社會の判斷する價值があるとしたのである。然しながら社會生活は有機體とは遙かに異なるものであつて、社會的集團はその性質、その行動に於て、有機體の細胞とは全く異なるところの、自己意識的、自決的な個人より成つてゐる。社會生活に於ては、有機體に類似を見出し得ない多くの條件がある。従つてこの説は一般の支持を受け得ないものである。

心理主義の立場より云へば、社會は共同の目的のために心理的相互作用の行はるゝ範圍である。個人は社會を形作る一人として、社會の構成に參與すると共にその影響を離るゝことを得ない。然しながらこの場合、總ての心理作用は個人の心に存する。個人心を超越する社會心はなく、個人の意識を超えてその外に立つ社會の意識はない。個人の心理的構成は社會的環境の下に發達し、その作用は社會的影響に支配せられる。暗示、模倣等が如何に個人の行動方法を決定し、個人の判斷を一樣化するかは、之れまで社會學者、心理學者の説明してゐるところである。

遺傳、習慣、傳統等が縦に異なる時代を通じて社會を同化する力となることは、横に同時代の個人に對する作用と同じく看過することを得ない。遺傳は生命の連續であるが、同時に社會的連續の生理的基礎をなすものである。之によりて世代より世代に涉り、その種族の内在的特性並に心理的機構が確實に保持せられる。即ち汎ゆる正常の個人は典型的なる本能を有ち、多くの習慣を形成すべき能力を有ち、又略ぼ同様に感情し、思考し、理知する能力を有つて

生れて来る。斯かる遺傳的能力あるにあらざれば、社會的連續の如きはあり得ない。事實上各個人の有機的構造の一樣性、心理的構成の一樣性によりて、歴史的社會的連續は可能とされる。斯かる能力は固より個人によりて異なることを免れないが、之を社會的に大觀すれば、一樣性を有するものと云ふは不當ではない。遺傳と共に社會的連續を可能ならしむる自然的基礎は、自然的環境の連續である。地理的環境並に之に加へられたる人爲的改造は、相當に永き期間を通じて習慣を維持し、習慣を打立つる力となる。總て此等は各個人に對し同様なる刺戟となり、相似たる反動作を起さしめ、斯くして社會的統一、社會的連續を可能ならしめる。

個人によりて取得せられたる習慣が、世代より世代に遺傳せらるゝことも、社會的連續に於ける主なる要素と考へられる。斯くして傳播せらるゝ習慣を社會的慣習と云ふが、この傳達の過程は、種々なる社會統制手段の壓力によつて一層確實にせられる。個人の社會に生れ來たるや、その環境は比較的確定したる行動方法を有ち、相互に或る定まれる關係を保つ人々を以て充たされてゐる。換言すれば、個人は比較的に固定せる社會的構造の内に生れて来る。この内にありて習慣を形成する能力によりて社會の行動様式を取り上げ、その社會生活を連續する。慣習はその起源並に生成に於ては心理的なれども、出來上れるものとしては各個人に對して外在的に働きかけるが故に、之を自然的要素の如く考ふことを得る。

此等の遺傳、環境、習慣等は人類以下の動物の社會的集團にも見出され、その社會的連續を説明し得るものであらうが、人類社會の歴史的文化的連續は、此等のみによりては説明せられず、更に他の要素を考へねばならぬ。それは謂ゆる社會的傳統によることであつて、過去より受繼がれたる知識、觀念、標準、價值等を意味する。之は即ち世代よ

り世代に根を張れる、思考し感情する習慣的方法であつて、人類の知識の發達によりて可能ならしめられたものである。我等の知る限り傳統は動物の社會には恐らく成立ち得ざるものにして、人類社會の連續を特徴づける特有のものである。高き文化の發展段階に於ける複雑せる習慣は、過去より受繼がれたる知識の集積なくしては、人類の社會に打立てられず又維持せられない。ホップハウスは云ふ、「傳統の社會の發展に於けるは、遺傳の種族の生理的發達に於けるが如くである。それは過去と未來とを結ぶ連鎖であり、その中に過去の效果は統合せられ、その基礎の上に將來の補正は樹立せられる」と。(L. T. Hobhouse, *Social Evolution and Political Theory*, pp. 34 ff.) 斯くして生ずる傳統の發達は、社會にとりては具體的物質的環境に置換ふるに、心理的環境を以てすることを意味し、文化的歴史的連續の基礎をなすものである。遺傳と傳統とは一は生物的にして他は心理的な本質上の差異があり、習慣と傳統とは一は多く行動の方法に關し、他は多く心理的内容に關する。

此等の作用によりて、個人はその接觸する特定の個人の心理作用によらざる、然かも物理的勢力にもあらざる、外部的なる拘束力を感じる。即ち個人の目的、意思に反し、之を抑制する社會的客觀の世界にあることを感ずる。デュルケムはこの事實に顧みて、我等は一の集團に生活する以上、そこに發達したる社會的潮流 *Courants sociaux* の支配を受けざるを得ない。この潮流は個人に對して外部的、客觀的な力として作用し、個人は自己の意思を抑へても、この力に従はねばならぬことを感ずると説き、外部性、客觀性、強壓性を有するの故を以て、社會意識の實在説をつた。(E. Durkheim, *Les règles de la méthode sociologique*, p. 9.)

然しながら如何なる意味に於ても、個人の心、個人の意識を超越する、社會の心、社會の意識を想定することは、

我等現在の科學的知識を満足せしめず、その實在を證明するに足る十分の材料は存しない。思考し、感情し、意思するものは個人であつて、社會は此等の個人の相互作用と共同作用との方法によりて結成されたものである。故に社會的集團に於ける個人の社會的心理現象はあるけれども、個人心と同様の意味に於ける社會心の如きものはない。社會心理現象は、個人外の事實の個人心理に反映せられて生ずる一面であり、社會生活によりて生ずる個人心の社會的側面に外ならぬ。即ち謂ゆる社會心は個人心の中に存する。謂はゞ社會心、社會意識にはあらずして、心の社會であり、意識の社會である。個人心理の立脚點より社會心理現象を説き、社會心理學を構成せんとする傾向の近時に於て漸く顯著なることは、至當の要求に出づるものと云はねばならぬ。

茲に價值現象の性質を明かにするためには、價值判斷の判斷としての内容を明瞭にすることを必要とする。この場合價值の判斷と實在の判斷 *Jugement de valeur et Jugement de réalité* とは明かに區別されねばならぬことである。一は單なる事實の判斷なるに對して、他は意識的主體に對する關係に於て、客體に或る意義を賦與する判斷である。前者の場合に於ては、主體の欲望、感情、意思等一切の意識狀態に顧みることなく、客體に或る性質を割當つるものにして、その判斷は客觀性を目指してゐる。然るに後者の場合にありては、客體に或る客觀的性質の存することを確定することのみを以て満足してはゐない。その判斷は評價的性質を有するが故に、感情、意思等の介入することを無視し得ないものである。若し客體たる事物、人、行爲等が主體の内に惹起すところの、斯かる心理的狀態を考慮の中に入らず、之を無視するものであるならば、それは全く價值判斷としての意味を失ふ。價值の判斷は純粹に客體の性質のみを取上げたものにあらず、その性質に對する主體の態度を示すものである。即ちそれは主觀性を有する。勿論こ

の場合、主觀的客觀的なる言葉の用ひ方には反對の意見のあり得ることを想像し得る。唯心論乃至は觀念論の立場に於ては、外界の實在それ自らも我等の心を離れては存在せず、事物は之を知覺する吾人の感性なくしては意味を有たない。事物の性質は之を理解する吾人の思考なくしては理解し得ないと云はれる。従つてその立場にありては、以上の如く客觀的と主觀的とを區別することは許されまい。然し觀念論が實在論かの古くして困難なる問題には、茲に立入るを必要としない。之を一方的に解決することは尙ほ永く多くの學者の思索に残してよい問題であらう。唯心論者の立場に於ては、有ゆる判斷はたとへ實在の性質を云ひ現はすものであるにしても、主體の心理によりて把握せられ、その心理狀態を反映するものと見らるゝが故に、主觀的である。従つてその意味より云へば、茲に云ふ價值の判斷は主觀を通じて把握するのみならず、評價的性質をも云ひ現はすものなるを以て、二重に主觀的である。この後の意味に於ける主觀性を取去るとき、總ての價值現象は消滅する。價值は主體の欲求、感情、理想等の意識狀態との關係に於て存在する。價值の判斷は屬性賦與的になると同時に、感覺的評價的である。之は個人の利那的なる印象より離れ、個人の一時的氣分とは異なる評價を事物に賦與する。評價が實在なるかの如き感を與ふるはこのためであるが、我等は感覺性を有すると同時に智能を有するを以て、その判斷は現在の心理狀態のみに局限せられない。従つて一方に回顧し得べく、他方に豫見することを得る。言ひ換へれば抽象することを得る、又普遍化することを得る。利那的印象より離れて事物を感覺し得て、之に客觀的なるかの如き評價を與へ得るはこの故である。然れば價值判斷の主觀的なることは孤立個人的なるにあらずして、謂はゞ社會個人的 socio-individual なることにある。

次に價值の存在するためには、主觀と客觀との間に若干の距離の存することを必要とするか。一般にはこの點を

承認するものゝ如く、殊に經濟價值に於て著しいことである。ジムメル G. Simmel によるも、享樂の利那、即ち主體と客體とが兩者の間に存したる衝突を排除するとき價值は吸收せられ、主體から分離せられ客體として之に對立せらるゝとき價值は現はれる。獲得の困難を感じ、喪失の懸念、獲得のために戦ふの必要を感じるとき價值は生じて來る。事物が我等に費さしむる努力は即ち一種の犠牲にして、獲得困難なればなるだけ、一層その價值は浮び上つて來る。この關係は、主體と客體との間に他の主體の立入ることによりても増加せられる。この場合、主體の間に競争を生じ、競争の範圍の擴大は需要の密度を増加するが故である。價值に客觀性あるが如く思惟せしむる原因の一は茲にもある。多くの人の爲し得ざる行爲なるが故に、或る行爲の善なる性質が高められ、容易に見出されざる景色なるが故に、美なる性質が増さるゝが如き一般の事實は存すれども、この關係は特に經濟價值の場合に明かにせられてゐる。即ち效用性と稀少性 *Nützlichkeit u. Seltenheit* とを以て、等しく經濟價值の原因として對立せしむることと是れである。例へばメンガアに従へば、經濟者の財に對する需要或は欲望と、支配し得べき財の量との關係に於て、前者が後者よりも大なる場合一般に價值の問題を生ずる。即ちその場合、欲望の一部は充足されずして残されねばならぬし、又支配し得べき財の極小部分の存在すると否とによりて、欲望充足が影響を受けざるを得ない。「今、經濟者がこの事情を意識するならば、即ち各部分量に對する支配に、若しくは上の如き數量關係にある各財に、彼等の欲望充足が依存することを認識するならば、この財は欲望充足そのものが彼等に對して有つところの意義を獲得することゝなる。この意義を我等は價值と呼ぶ。故に價值は我等の欲望充足が財に對する支配に依存することを意識することにより、財が我等に對して得るところの意義である」とした。(Grundsätze, 1923, S. 102-3.) 而してメンガアに於ては、上述の如

き需要或は欲望と支配し得べき財の量との數量關係は、凡そ經濟性 *Wirtschaftlichkeit* の、從つて又財の經濟的性質 *der ökonomische Charakter der Güter* の發生する唯一の條件であるが故に、財はこの關係に遭遇することによりて、經濟財たる性質を得ると共に價值を得る。從つて價值現象は斯かる數量關係にある財に就てのみ見られる。然らざる財は欲望充足に役立ち得る能力、即ち效用性は有するのであるが、事情が變じて上述の數量關係に立つに至らざる限り、價值を有し得ないことゝされてゐる。

私見によれば、主體と客體とは離れて存在することを前提とし、兩者の融合するとき、價值現象も亦解消せられることは云ふ迄もないが、それは兩者の離れて存在することを要求するのみであり、必ずしもその間に獲得の難易、存在量の多寡を問題とする證明にはならぬ。稀少性並に獲得の困難は、同じく價值の原因たることの中にも從屬的な關係に立つ。稀少を感じしめ、獲得の欲望を持たしむるは、既に效用性を認むることを前提とするが故である。稀少性、獲得の困難と云ふは、物理的絶對的意味に於て云ふにあらずして、客體と主體との相對的關係に於て云ふことである。稀少なりとすること既に有用なることを前提するものでなくてはならぬ。

即ち價值現象の現在するためには、觀念上價值質意識と價值量意識とを別けて考へねばならぬ。具體的事實の問題としては、恰かも數學上の廣さなくしてたゞ位置のみを有する點を考ふことの困難なると同様に、價值の存在を思ふためには、價值の性質と共に價值の大きさを考へざるを得ぬことが少くないであらう。價值質のみありて價值量なきものを想定することは、少くとも流通經濟の現象としては意味のないことである。然し事實上より之を見るも、價值を有するためには稀少なるのみにては足らず、先づ何等かの效用あることを前提せねばならぬ。經濟價值は費用なく

して存し得れども、效用若しくはその豫想なくして存するを得ない。費用を投ずるとも價值を生ぜしめないことがあり得る。或る客體を有價值の狀態に導き來るがために、如何に多くの費用を要したりとするも、それが主體によりて價值ありと判斷せらるゝにあらざれば、價值を生ずることはない。或る客體を得るがために勞働及び生産費の投ぜらるゝと云ふも、結局之が價值ありと判斷せらるゝに至るべきことを前提するが故にして、勞働及び生産費を誘導して、之に特定の方向を取らしむる所以がなくてはならぬ。その原因は用ひらるゝ勞働の以前にあり、加へらるゝ生産費に先ちて存在し、價值の根源として第一次的な性質を有するものである。等しく價值なる意味に於て同様の立場にあるべきに拘らず、謂ゆる超越的價值 *transzendentaler Wert* と稱せらるゝものが、客觀的存在量とは全く關係なくあり得るに對して、經濟價值のみが特殊の取扱を受けるが如く見らるれども、（この點に就ては例へば左右田喜一郎全集卷第二、四五一頁以下を參照）この意味に於ては經濟價值も異なるところはない。

以上の如く解せらるゝ主觀的な價值は、評價者の意識的存在であり、従つて意識一般の性質として、大さは有すれども測定し得べき量ではない。然るに交換せらるべき財の價值が相互に比較せられ、その結果として交換せらるべき比率となり、價格として表示せらるゝときは、明かに正確に測定せられ得る量となり、純然たる客觀的數量として取扱はれる。主觀的狀態より客觀的數量に至る展開には、その間踰ゆべからざる溝渠を越え、論理を飛躍せしめてはゐないか。既に或る財に對する意識狀態が他の財に對する意識狀態と對立せられ、兩者が選擇可能のものとして比較せらるゝところに、主觀から客觀へ、價值より價格への展開を導くべき萌芽がある。

巧妙なる例證は決して事物本來の性質を明かにするものにあらず、比喻は往々にして跛となるが、凡そ斯くの如き

事實は、我等の社會生活の上に屢ば見らるゝ著しき現象にして、社會生活に於ける便宜の要求の産みたるものに外ならない。主觀的意識の狀態を表示するに、言語文字等の如き客觀的表現を以てし、然かも何等の不合理をも思はざるが如きは、常に身邊に見らるゝ著しい場合である。ヘアダア J. G. v. Herder の嘗て云へる如く、如何にして眼による形像や總ての感覺を、音聲によりて代表せしむることを得るか。否、思想を音聲に表現せしめ、音聲を更に記述の上に表示することを得るか。若し突如として我等にこの謎の如き疑問を發せらるゝとしたならば、恐らくは我等は、最も異なる對象を混同し、色を音に、音聲を思想に轉化せんと試むる狂人の試問として排棄するであらう。然しながらこの謎の如き事實こそ、實際生活の上に疑惑を容れざる解答として存在せるところである。具體的表現それ自らとしては、當然に主觀的状態と本質相通するものにあらず、客觀化を許されたものではないが、兩者を結びつけ、相互に關聯せしむること屢ばなるときは社會的理解を生じ、殊に之が社會的慣行ともならば、兩者は不可離の關係を我等の觀念上に得て、その本質相隔たることには顧みらるゝことなく、その推移する徑路を問はるゝことなく、客觀的表現は直ちに主觀的状態の表示なる如く見らるゝに至る。是れ本來、主觀を客觀化することの可能なるがためにあらずして、社會生活に於ける便宜の要求に基き、一般に是認せらるゝに至つたものである。主觀的價值より價格的表現への心理的經過も、之とその趣を一にする。即ち價格は主觀的な經濟價值を正確に客觀化したものではなく、流通客體に對する價值判斷に基き、流通當事者によりて設定せられたものに過ぎない。その間の推移には何等の不合理もなく、況んやまた魔術もない。

價值の理論には尙ほ數多の問題が含まれてゐるが、複雑多岐の論點を涉獵しゆくことは茲に私の目指すところでは

ない。殊に價値理論については、我國に於ても既に先輩の取扱はれた貴重の文献が多いが、こゝでは殊更に之に關説しなかつた。この小篇に於ては、たゞ經濟價値理論の理論上の地位と、價値現象の性質とにつき、率直に私見を述べ、て他日の修正を約束するに止めたい。(昭和九、三、三〇、稿了)